

4 飼料作物

1) いね科牧草

病 害 虫 名	防 除 時 期	防 除 方 法	備 考
雪腐小粒 菌核病	秋期	○ 窒素過多で発生が助長されるので、根雪前の追肥（窒素）は控える。 ○ 適期に播種し、越冬前に十分な株を作る。	○ 耐雪性品種を用いる。
褐色雪腐病	秋期～春期	○ 停滞水が生じないように、排水を良好にする。	
葉腐病	夏秋期	○ 高温多湿が予想される場合は利用を早めて過繁茂にならないようにし、窒素の過用や硫酸根肥料の施用は控えてリン酸、カリを十分に与える。 ○ 雨天下での刈取りを避ける。	
すじ葉枯病		○ 常発地ではまめ科牧草を混播するほか、刈り高をやや低めにする。	○ 抵抗性品種を用いる。
冠さび病	夏秋期	○ 若刈りを励行する。	○ 抵抗性品種を用いる。
アワヨトウ	発生初期	○ 対象害虫の発生初期に刈取りを行う。	
ムギダニ	晩秋・早春	○ 適時の更新に努め、秋季播種前にプラウ耕により卵を深く埋没させる。	

2) まめ科牧草

病 害 虫 名	防 除 時 期	防 除 方 法	備 考
菌核病		○ 秋季播種の場合は、根雪前の生育が7葉期以上になるよう、9月上旬までの播種を徹底する。	○ 常発の場合は深耕を伴う更新を行う。 ○ 抵抗性品種を用いる。
モザイク病		○ アブラムシならびに雑草の除去を徹底する。	○ アブラムシ防除の項参照 ○ 被害茎葉はできるだけほ場から除去する。
斑点病		○ いね科牧草も含め、過繁茂にならないようにする。	
アブラムシ類		○ 発生が多いときは早めに刈取りを行う。	
ウリハムシ モドキ		○ 過放牧や過剰な刈取りを避け、草勢を維持し、裸地の侵入を避ける。	

3) 飼料用とうもろこし

病 害 虫 名	防 除 時 期	防 除 方 法	備 考
ごま葉枯病 すす紋病		○ 長期連作を避け、ソルガム等を栽培する。 ○ 早期に播種し、初期生育を確保する。 ○ 被害茎葉はできるだけほ場から除去する	○ 抵抗性品種を用いる。
黒穂病		○ 連年の発生が見られる場合は3年以上他作物を栽培する。 ○ 早期発見に努め、発病株は速やかに抜き取り、焼却するか地中深く埋める。	○ 抵抗性品種を用いる。
萎凋病 (根腐病)		○ 早期に播種し、初期生育を確保する。 ○ 未熟堆きゅう肥を施用しない。 ○ 水により媒介されるので排水を良くする。	○ 抵抗性品種を用いる。
すじ萎縮病		○ 多発ほ場では他作物を栽培する。 ○ 主な媒介昆虫であるヒメトビウンカの発生盛期（4月中旬～5月中旬）に出芽が合わないようにする。	
紋枯病		○ 連作ならびに密植を避ける。	
アワノメイガ		○ 発生ほ場では、越冬源となる収穫後の刈株・茎はほ場に放置しない。	
アワヨトウ		○ 産卵対象となるメヒシバなど雑草の防除に努める。	
タマナヤガ		○ 雑草の防除に努める。 ○ 未熟堆きゅう肥を施用しない。	
ハリガネムシ類		○ 常発地での栽培は避ける。 ○ 永年草地からの転用後1年目は好発することから殺虫剤での防除も取り入れる。	

4) ソルガム

病 害 虫 名	防 除 時 期	防 除 方 法	備 考
紫斑点病		○ 被害が広がる前に適期内に刈取る。 ○ 被害茎葉はできるだけほ場から除去する。	○ 抵抗性品種を用いる。
すす紋病		○ 被害が広がる前に適期内に刈取る。 ○ 肥料切れしないように充分施肥する。 ○ 発病した畑では連作を避ける。 ○ 被害茎葉はできるだけほ場から除去する。	
アワヨトウ		○ 産卵対象となるメヒシバなど雑草の防除に努める。 ○ 窒素肥料の多施を避ける。	